

日本現在〔南宋〕刊『大藏一覽集』について

牧野和夫

はじめに

近年著しい寺院聖教類の研究進展によって旧稿を訂正乃至は補強・展開すべき箇所も一、二に止まらない。一、二例を挙げるならば、神田邦彦『続教訓鈔』の本文批判に向けての一考察」（『中世文学』59号、2014・6）の注（11）、更には佐藤禮子「興聖寺舊藏の典籍」（『中國典籍日本古寫本の研究』創刊号、2014・7）の「興聖寺公用印」についての記述などである。

また、漢籍・仏書テキストのデータベース普及による出典研究の展開は、従来かけはなれて推進されてきた研究領域に想外な連関をもたらすこととなった。南宋刊本と日本中世の説話（作品）との緊密な関係について小林

直樹「無住と南宋代成立典籍」（『文学史研究』53号、2013・3）を始めとした少なからぬ論考が公刊され、ささやかではあるが「活況」を呈している。小林直樹が採り上げている『大藏一覽集』については、牧野「日本中世鎌倉前中期の寺院における出版―その背景と遞藏過程の一、二の事実―」（『アジア遊学』2014・7）にも既にふれたことで繰り返しになるが、次のように記した。

「既に宋刊大藏經の舶載が法華山寺慶政・千葉寺了行などの連携に係る同大藏經の補刻事業と密接につながる事実を指摘して久しいが、福建の補刻事業と同時頃（やや先立つか）に大藏經と関連した出版事業も福建を軸に展開していたわけで、その典籍の舶載は刊行とほぼ同時に日本に齎されていた、と考えられる。『大藏一覽集』の宋代中国に

おける刊行の時期とその舶載・活用 of 時期の近接はその典型的な一例であろうか、と思われる。」

近時、我が国に舶載された『大蔵一覽集』の刊刻・刷印時期の推定を試みた（口頭発表「南宋刊『大蔵一覽集』とその周辺」於宋版研究会）ことと関連しての記述である。

一、高山寺旧蔵『大蔵一覽集』卷二について

かつて、京都岡崎近くの古書肆丹波屋が所蔵し個人的に入手予定でいた「南宋」刊『大蔵一覽集』一帖について『大蔵一覽集』十卷の撰者は明人か」（『実践女子大学・短期大学後援会』会報』41号 1988・8）と題した報告記事を書いた。その中でこの一点の南宋刊本の書誌的な紹介をほぼ終へ高山寺旧蔵の一点であることを指摘した。すなわち、

「厚手の紙帙表紙（経装）に包まれ、表紙に「大蔵一覽第廿六箱」と墨書ある紙片を貼る。内題並びに本文初行は「大蔵一覽集卷第二／ 寧徳優婆塞陳實謹編／題四門○良由善惡二途故使升沈六道／……」、天地横單辺の界線（界高約二〇・二糎）、無界、一板六面每半折八行々十八字、両面刷り。版心に「第二卷 三山王悦刊」（第一折の折り目へノド）の如し。刻工名は刻すこと少なくして、

「王」「良」「江昌」「蔡義」。稀に墨の訓・送り仮名が見られる。「ハ」「ハ」「个」など鎌倉期にかかる古体の仮名が認められる。

また、一貫して「敬」「驚」字に欠画が存する。「法苑珠林」や「宗鏡（録）」「指要録」などの書名を処々に認める。卷首下方に「高山寺」の単郭朱文印があるが、いつ頃捺されたものか不詳。一面行数・字詰・版心より判断して、単行の刊経と考えられる。」

以上、簡単に摘記した事項をかえりみ、料紙・字様・印面の古び具合を加味して、南宋頃の刊刻にかかる中国宋代の古刊経と推定しよう、と判断した。更に、次の指摘をした。

『高山寺経蔵典籍文書目録 第二』（1975・3 東京大学出版会）頁304～305に認められる一具の宋刊の『大蔵一覽集』がある。

「32 大蔵一覽集卷第一（宋版） 一帖

（卷中内題）「大蔵一覽集卷第一中」

○南宋時代刊、折本装、首中缺、天地横界、一頁八行、一行十八字、一版三面（六頁）、両面刷、版心記折目アリ、墨點（假名、鎌倉中期）、
（刻工名）「王良」「良」

33 大蔵一覽集卷第三(宋版) 一帖

○體裁等第32號二同ジ、但シ首尾缺、卷第三ノ巻尾ハ次ノ第34號卷第四ノ巻首ヲ附シタリ、墨點(假名、鎌倉中期)、

(刻工名)「良」「王悦」「悦」「昌」「茂」「王」

34 大蔵一覽集卷第四(宋版) 一帖

○體裁等第32號二同ジ、但シ首尾缺、巻首ニ巻第三ノ末尾ヲ附ス、一部補寫、

[高山寺朱印、墨點(漢文注文、假名、鎌倉中期)、原表紙、(刻工名)「悦」「江茂」「江昌」「良」]

35 大蔵一覽集卷第五(宋版) 一帖

○體裁等第32號二同ジ、但シ首尾完、巻第四ノ尾ヲ巻首ニ附シタリ、[高山寺朱印、

(刻工名)「良」「江」「江昌」]

36 大蔵一覽集卷第七(宋版) 断簡一葉

○體裁等第32號二同ジ、

37 大蔵一覽集卷第九(宋版) 一帖

○體裁等第32號二同ジ、但シ首尾完、[高山寺朱印、無點、

(刻工名)「德明」「江昌」「昌」

38 大蔵一覽集卷第十(宋版) 断簡一括

○體裁等第32號二同ジ、但シ首尾缺、無點、

(以上第32號ヨリ第38號マデ僚卷ナリ、)

とある。書誌事項について寸法などの情報もなく、判断材料として難しい面もあるが、丹波屋旧蔵本の「天地横單辺の界線(界高約二〇・二糎)、無界、一板六面每半折(三折)八行々十八字、両面刷り」が、高山寺本の「天地横界、一頁八行、一行十八字、一版三面(六頁)、両面刷」に合致し、[高山寺朱印も共通しており、刻工も「王」「良」「江昌」が共通する点を考慮すれば、同版の巻二と考えざるをえない。しかも高山寺現蔵の『大蔵一覽集』が巻二を欠く点から見れば、高山寺現蔵『大蔵一覽集』と版式をほぼ同じくした丹波屋旧蔵『大蔵一覽集』巻二を高山寺現蔵の五帖並びに断簡一括・一葉の僚卷である、と判定して誤らないであろう。

二、刻工「王良・王悦・江茂・江昌」について

高山寺現蔵・旧蔵『大蔵一覽集』十卷(欠卷六・八)について、その刊行時期を考察する。その際に有益な情報を

もたらしてくれるのが、刻工名である。現在進行中の福州版大藏経の総合的な書誌調査は未だその途上にあるが、その途中経過報告も兼ねて刻工名の事例報告から既述の内容を検証してみたい。

本源寺蔵『大藏経』（紹定癸巳〔6年・1233〕、甲午〔端平元年・1234〕あり）に見る刻工名「王良・王悦・江茂・江昌」を軸にした事例報告からはじめることになるが、順序として個々の刻工に分けて検討したい。

A、「王良」

本源寺蔵大藏経では、9個所に「王良」を拾うことが出来る。

目録の通し番号で、136・296・644 726
728 964 969 1026 1077である。一覧表の見方は、⑦のように○に7の場合は、第7板を示すもので、A1やB1などは施財刊語の存在を示し、A1⇨安撫使賈侍郎捨、A2⇨安撫使侍郎捨、B5⇨廣東運使會寺正捨という刊語に該当する。「644 大方炬陀羅尼経卷10 ③王良 B5」を例にとれば、目録通番644の『大方炬陀羅尼経』卷10の第3板に刻工名「王良」とあり、「廣東運使會寺正捨」という刊語がある、ということである（以下、すべて同様の略号を使用）。

- 136 大寶積経卷113 ⑦王良
- 296 大放光佛華嚴経卷36 ⑨王良
- 644 大方炬陀羅尼経卷10 ③王良 B5
- 726 優婆塞戒経卷1 ⑬王良 B5
- 728 々 卷5 ⑮王良 B5
- 964 長阿含経卷3 ⑮王良刀 B5
- 969 々 卷10 ⑰王良 B5
- 1026 増一阿含経卷27 ⑳王良 B5
- 1077 人本欲生経卷10 ⑩王良 丙午

という結果になる。

すべて東禪寺版、九例中の六例、ほとんどが施財刊語「廣東運使寺正會置捨」を有する板を担当している。ここで廣東運使寺正の會置について若干触れておく。

金沢文庫蔵『首楞嚴経義海』卷二七東禪寺版の尾題記に「朝議大夫廣南東路轉運判官曾置敬施俸資就東禪大藏経板内揀出朽蟲漫滅有妨看誦者重加刊換永久流通 寶慶貳年丙戌四月 日 謹題 監修 沙門 元彰 師□ 有輝 住持沙門 祖洪」

とあり、寶慶貳年丙戌四月と題した補修刊語に「就東禪大藏経板内揀出朽蟲漫滅有妨看誦者重加刊換」とあるのである（『神奈川県立金沢文庫保管未版一切経目録』に拠る。以下、金沢文庫蔵本は、この目録に拠る）。先に紹介した

「曾噩字子肅閩縣人植之子終大理寺正」（淳熙三山志 卷

31）や靜嘉堂文庫藏『新刊校定集註杜詩』の「博採而取

其至精者矣其書刻於宋孝宗淳熙八年至理宗寶慶元年曾噩為

廣南東路轉運判官重為校刊」なる一節など（牧野「開元寺

版大藏經の〈修〉の世界についての一、二の問題」『実践国

文学』77号 2010・3）を考え合わせるならば、「王

良」は、寶慶元・二年頃（1225・6）に曾噩によって

着手された東禪寺版大藏經の補刻作業に従事していた、と

見るべきことが判明する（同版の一点を、台湾故宮博物館

が蔵すること、阿部隆一『増訂・中国訪書志』〈汲古書院・

1983・3〉著録・解題参照。芳村弘道氏の御教示）。

ところで金沢文庫蔵『大藏經』に刻工名「王良」を拾う

ならば、次の事例が確認できる。

ア、大般若波羅蜜多經 卷2 ⑭王良刊⑭安撫使賈侍郎捨

イ、大般若波羅蜜多經 卷3 ①丙午①王良

ウ、大般若波羅蜜多經 卷16⑦王良⑦廣州居住太恭人李

氏淨真捨

エ、大般若波羅蜜多經 卷33⑬王良⑬廣州住林氏四娘為

オ、大般若波羅蜜多經 卷41⑪王良⑪廣州光孝寺比丘崇榮

カ、大般若波羅蜜多經 卷50⑨王良⑨廣州住何氏道全捨

キ、大般若波羅蜜多經 卷67①王良①忠翊郎新惠州巡檢

黃繼勳捨

ク、大般若波羅蜜多經 卷103①王良①廣州光孝寺比丘

祖□捨

ケ、大般若波羅蜜多經 卷130⑥王良⑥安撫使賈侍郎捨

コ、大般若波羅蜜多經 卷181⑧王良⑧廣州光孝寺比丘

祖昇捨

サ、大般若波羅蜜多經 卷209⑤王良刀⑤廣東運使寺正

曾噩捨

シ、大般若波羅蜜多經 卷230⑬王良⑬廣州開善寺比丘

尼宗竜為恩有捨

ス、大般若波羅蜜多經 卷242③王良③廣州光孝寺比丘

祖昇捨

セ、大般若波羅蜜多經 卷246④王良④廣州住鄭中光考

鄭二十郎生界捨

ソ、大般若波羅蜜多經 卷258⑧王良⑧廣州光孝寺李道

為恩友捨

タ、大般若波羅蜜多經 卷318⑫王良⑫廣州居住曾有為

自身并室中捨

チ、大般若波羅蜜多經 卷324⑥王良⑥廣東運使寺正曾

噩捨

ツ、大般若波羅蜜多經 卷327⑩王良⑩廣州居住悟明堂

道成為妣李念五娘捨

テ、大般若波羅蜜多經 卷353 ①王良①廣東運使寺正曾

鹽捨

ト、大般若波羅蜜多經 卷409 ⑨廣東運使寺正曾鹽捨⑨

王良

ナ、大般若波羅蜜多經 卷424 ①廣東運使寺正曾鹽捨①

王良

ニ、大般若波羅蜜多經 卷454 ⑦丙午⑦王良

ヌ、大般若波羅蜜多經 卷481 ⑥王良⑥住廣州悟性寺比

丘祖通捨

ネ、大般若波羅蜜多經 卷488 ⑭王良⑭廣州居住陳智常捨

ノ、大般若波羅蜜多經 卷499 ⑪王良⑪廣州城西居住朱

氏太君捨

ハ、増一阿含經 卷27 ③廣東運使寺正曾鹽捨③王良

ヒ、雜阿含經 卷18 ④王良④廣東運使寺正

フ、仏説人本欲生經 ⑩丙午⑩王良

ヘ、起世因本經 卷10 ⑦王良⑦廣東運使寺正曾鹽捨

ホ、首楞嚴經義海 卷2 ①②廣東運使曾寺正捨①②王良

本源寺藏本と増一阿含經・仏説人本欲生經の二例重複す

るが、31例を捨うことができる。一目して四類に仕分け
することができると気づく。すなわち、

「①丙午①王良」などの「王良」と「丙午」の組み合

わせ Ⅱイ・ニ・フ

「廣東運使寺正曾鹽捨」と「王良」の組み合わせ

Ⅱサ・ト・ナ・ハ・ヒ・ヘ・ホ

「安撫使賈侍郎捨」と「王良」の組み合わせⅡア・ケ

「廣州……」と「王良」の組み合わせ

Ⅱウ・エ・オ・カ・ク・コ・シ・ス・セ・ソ・タ・

ツ・ヌ・ネ・ノ

「大般若波羅蜜多經」卷3・卷454・「仏説人本欲生經」

などに認められる「丙午 王良」とある「丙午」の年は、

淳熙13年(1186)か淳祐6年(1246)に比定で

きようが、本源寺藏宋版大藏經の東禪寺版の刷印時期(最

終補刻時期で確認できるのは、端平元年(1234)である)

を考慮するならば、淳熙13年(1186)の王良の刻雕

の可能性が高い。いずれにしても「廣東運使寺正曾鹽捨」

で検討した寶慶元・二年頃(1225〜6)に東禪寺版大

藏經の補刻作業に従事していた「王良」とはなだらかな連

続性を認めたいものである。「安撫使賈侍郎捨」と「王良」

の組み合わせは、二例であるが、重要である。賈選という

宋人についても、漢籍本文データベース(劉淵林制作)に

拠れば、『淳熙三山志』卷5に「皇華館還珠門外舊春風樓

地淳熙十四年安撫賈選創建」とあり、『福建通志』卷15

などの福州府の祀廟記事中に「淳熙十四年安撫使賈選」と

もあり、淳熙十四年頃における「安撫賈選」の活躍が認め

られる。醍醐寺蔵『大智度論釈』卷九十一の尾題前行に「十四
昏尾 安撫使賈侍郎捨 泗 淳熙己酉歲重雕此板」と

あるのが醍醐寺蔵宋版大藏經の年紀で最も新しいものである。淳熙己酉は淳熙16年で1189年に当る。安撫賈選の捨財で補刻された葉である。刻工「王良」の活躍した時期が「丙午」の年の淳熙13年（1186）であることとほぼ時期的な一致をみるのである。次に「廣州……」と「王良」の組み合わせであるが、15例を数え最も事例が多い。年次などの手懸りをえられそうなものはなく、廣州光孝寺の僧の捨財が多い点が注目される。同様な傾向が次項「王悦」にも存し、金澤文庫蔵『大般若波羅蜜多經』卷309

「①王悦①廣州居住林達琦・為自身丙午捨」とあり、「廣州……」と「王良」の組み合わせも「王悦」と「廣州……」の組み合わせも、おそらく「丙午」の頃、すなわち淳熙13年（1186）頃と考えても無理は無いであろう（施財刊語「廣州……」と刻工「王良」「王悦」「周泗」などの組み合わせについては、近刊予定の『実践女子大学文学部紀要』57集所収稿（2015・3刊予定）参照）。「廣東運使寺正曾璽捨」で検討した寶慶元・二年頃（1225～6）に東禪寺版大藏經の補刻作業に従事していた「王良」との関係が不審として残る。

B、「江昌」

「王良」における淳熙13年（1186）頃と約四十年後の寶慶元・二年頃（1225～6）と二期にわたる刻雕活動は、「江昌」にも同じく認められるものである。

本源寺蔵大藏經では、27箇所「江昌」を捨うことが出来る。目録の通し番号で、

414	420	461	469	475	483
637	726	778	870	923	998
1017	1044	1050	1067	1086	
1344	1533	1543	1772	2002	

2004である。

大寶積經	卷73	⑥江昌⑥安撫使賈侍郎捨
大寶積經	卷82	⑬江昌⑭江昌⑮江昌⑯安撫賈侍郎捨
大方廣佛華嚴經	卷10	⑩江昌⑩安撫使賈侍郎捨
大方廣佛華嚴經	卷5	⑤江昌⑤廣東運使寺正曾璽捨
妙法蓮華經	卷1	⑪江昌⑪安撫賈侍郎捨
寶雨經	卷7	⑧江昌⑧安撫賈侍郎捨
文殊師利現寶藏經	卷上	③江昌③安撫賈侍郎捨
入楞伽經	卷1	⑤江昌⑤安撫賈侍郎捨
大法炬陀羅尼經	卷3	④江昌④泉州施主捨
優婆塞戒經	卷1	④江昌⑪江昌④安撫賈侍郎捨⑪

安撫買侍郎捨

金剛般若羅蜜經論 卷下 ⑥江昌⑥廣東運使寺正曾噩捨

□論捨罪福品第一 卷上 ④江昌④安撫買侍郎捨

佛性論 卷2 ⑫江昌⑫廣東運使寺正曾噩捨

中阿含經 卷3 4 ⑥江昌⑥安撫使買侍郎捨

增一阿含經 卷7 ④江昌④廣東運使寺正曾噩捨

雜阿含經 卷数 2 3 ? 不明 ⑧江昌⑧廣東運使寺

正曾噩捨

雜阿含經 卷2 9 ⑩江昌⑩廣東運使寺正曾噩捨

樓炭經 卷4 ②江昌②安撫使賣侍郎捨

五分律 卷5 ⑨江昌⑩廣東運使寺正曾噩捨

阿毘曇毘婆沙論 卷3 5 ⑤江昌⑤泉州衆施主捨

阿毘曇毘婆沙論 卷4 7 ⑤江昌⑤泉州衆施主捨

立世阿毘曇論 卷7 ⑪江昌⑪安撫買侍郎捨

「江昌＋安撫（使）買侍郎捨」の事例が15例、「江昌＋

廣東運使寺正曾噩捨」の事例が7例、新たな事例として

「江昌＋泉州（衆）施主捨」が3例ある。「王良」における

淳熙13年（1186）頃と約四十年後の寶慶元・二年頃

（1225～6）と二期にわたる刻雕活動がここにも確認

できた。

ここで金沢文庫蔵『大藏經』に認められる刻工名「江昌」

を見てみよう。

・大般若波羅蜜多經 卷六七 ③安撫買侍郎捨③江昌

・88⑧江昌⑧安撫使賣侍郎捨

・124⑤廣東運使曾噩捨⑤江昌

・397⑨江昌⑨安撫使買侍郎捨

・412⑫江昌⑫安撫使買侍郎捨

・504③江昌③安撫使買侍郎捨

・544①江昌①廣東運使寺正曾噩捨

・増一阿含經 第七④江昌④廣東運使寺正曾噩捨

・25⑫江昌⑫安撫使買侍郎捨

・41⑤江昌⑤廣東運使寺正曾噩捨

・雜阿含經 第二三⑧江昌⑧廣東運使寺正曾噩捨

・26⑦泉州施主捨⑦江昌

・29⑩江昌⑩廣東運使寺正曾噩捨

・47⑭江昌⑭廣東運使寺正曾噩捨

・起世因本經 卷二⑦江昌⑦廣東運使寺正曾噩捨

・5⑧江昌⑧廣東運使寺正曾噩捨

・樓炭經 卷四②江昌②安撫買侍郎捨

金沢文庫蔵本を加えても傾向は、変わらないのである。

江昌は、醍醐寺蔵『大寶積經』卷73などで「安撫使買

侍郎捨」と刻した賈選施財による板木を担当しているので、

淳熙16年に至る淳熙14年頃の仕事と推定できる。

C、「江茂」

本源寺蔵大蔵経では、2個所に「江茂」を拾うことが出来る。目録の通し番号で、1608・1777である。

1608 阿毘達磨大毘婆沙論卷50 ⑦江茂 丙辰
(1196年) A2

• 1777 舍利弗阿毘曇論卷7 ⑫江茂 丙辰 安撫
買：

事例が少ないが、2例すべて「丙辰(1196年)」と「安撫買侍郎捨」とを伴っていることに特徴がある。「王良」の「丙午」から十年後に当る。

この事例に金沢文庫蔵『大蔵経』に認められる刻工名「江茂」を加えても、この傾向は同じである。

大般若波羅蜜多經 卷四八九 ⑪丙辰⑪江茂 安撫
使買侍郎捨(金沢文庫)

大般若波羅蜜多經 卷五八二 ⑩賈侍郎捨⑩江?茂

D、「王悦」

本源寺蔵大蔵経では、2個所に「王悦」を拾うことが出来る。

目録の通し番号で、296・668

• 296 大放光佛華嚴経卷36
• 668 大方広円覚修多羅了義經 ②王悦 A1

安撫使買侍郎捨

金沢文庫蔵『大蔵経』に認められる刻工名「王悦」は以下の通りである。

大般若波羅蜜多經 卷二三⑦王悦刀⑦住廣州開元寺比丘行澄為恩有捨

大般若波羅蜜多經 卷37⑤王悦⑤廣州光孝寺比丘了信捨
大般若波羅蜜多經 卷63④王悦④住廣州開善比丘尼善端捨

大般若波羅蜜多經 卷76②安撫使買侍郎捨②王悦
大般若波羅蜜多經 卷140⑩王悦⑩廣州真乘寺住持比丘

真悟捨

大般若波羅蜜多經 卷173⑨王悦⑨廣州居住林真為亡室
□氏二十二娘資生界捨

大般若波羅蜜多經 卷211②王悦②前住廣州景恭寺比丘
祖傳捨

大般若波羅蜜多經 卷229⑧安撫使買侍郎捨⑧王悦

大般若波羅蜜多經 卷242⑦王悦⑦廣州居住李思明為士
室柯氏捨

大般若波羅蜜多經 卷309①王悦①廣州居住林達琦?為
自身丙午捨

大般若波羅蜜多經 卷354⑥安撫使買侍郎捨⑥王悦

大般若波羅蜜多經 卷436⑤王悦⑤安撫使買侍郎捨
大般若波羅蜜多經 卷503②安撫使買侍郎捨②王悦

ほぼすべて「安撫使賈侍郎捨」と「王悦」の組み合わせ、「廣州……」と「王悦」の組み合わせの二種から成り、巻309の如きは「丙午」を含む。おそらく刻工「王悦」も「丙午」の頃、すなわち淳熙13年（1186）頃に活躍した刻工と考えて無理は無いであろう。

三、「安撫使賈侍郎捨」と「廣東運使寺正曾噩捨」

「王良」の項での不審が「江昌」においても顕著に認められる。安撫使賈侍郎、すなわち賈選という宋人の捨錢による淳熙13～16年（1186～9）頃の補修事業に活躍した「王昌」と「廣東運使寺正曾噩捨」で検討した寶慶元・二年頃（1225～6）の東禅寺版大藏經の補刻作業に従事していた「江昌」とにはなだらかな連続性を認めがたいのである。

既に「宋刊一切経に関する一、二の問題―我邦船載東禅寺版の「刊・印・修」の問題を軸に―」（『実践国文学』73号、2008・3、頁90～91）で指摘したが、「安撫使賈侍郎」（賈選）の捨財による補刻事業も、一・二年という短期のものではなく、少なからぬ複数年に亘るもので、「安撫使賈侍郎捨」と刻雕した補刻葉は、淳熙16年（1189）以降にも及ぶ。醍醐寺藏大藏經の磨滅や、甚

しい葉などが、本源寺藏大藏經・書陵部藏大藏經などにおいて「安撫使賈侍郎捨」と刻した補刻葉に替っているのである。おそらく1200年前後迄、継続していたのではないか。印面の比較検討も必須のものとなろう。

かつて次のような事例を分析し同様な問題点に逢着したことがある。東禅寺版については、牧野「日本船載東禅寺版一切経の刊・印・修をめぐる一、二の問題」（『東アジア出版文化―にわたずみ』2004・3 二玄社）、開元寺版おける同様な問題については「開元寺版大藏經の〈修〉の世界についての一、二の問題―墨丁追刻と題記入れ木―」（『実践国文学』77号 2010・3）で論究した。長くなるが、とくに関連することの深い一節をそれぞれの拙論より引文させて頂きたい。いずれも南宋末の勸進僧道永をめぐる考察から浮上した事例である。

「道永の勸進活動は、道永の勸進活動は、福州を中心に、淳祐四年、五年（甲辰・乙巳）の頃に活発な勸化活動が行われたことについては、野澤佳美氏「金沢文庫藏宋（福州）版一切経」（『神奈川県立金沢文庫保管宋版一切経目録』平成10・3・20）に指摘があり、又、牧野「日宋の「版刻」を結ぶもの」（『日本文学』7月号、2001・7・10）も、道永勸進の時期と日本僧慶・了行・意教の捨財時期とに関わる緊密な関連を追究している。福建の地の持つ意味は、

慶政の渡宋期にも関わり重要であるが、ここでは省略する。

もし、東寺藏宋版一切経の内の大般若に見られる墨丁箇所が、庚辰の年、嘉定13年（1220）の補刻の際のものと推定するならば、乙巳、淳祐5年（1245）に至って東禪寺前知藏道永の勸進に応じた「捨財」の資を以て、追雕されたことになる。24年後の「捨財」の資を以て墨丁箇所を追雕し、「補刻」時期と「施財」時期とに最大24年の径隔があったことになる。

なお、東寺藏宋版大般若経の墨丁箇所が金沢文庫・宮内庁書陵部の両藏の東禪寺版大般若経巻218第14板にもそのまま未雕の状態が残っているのである。金沢文庫蔵本将来の時期、1260年を刷印時期にほぼ連続すると想定するならば、墨丁の状態のままで約40年を経過してきたことになる。24年或いは40年の経過を考えるならば、刻工の顔触れも大きく変わり、同一刻工の活躍期を望むことは難しい。中国南宋の仏書補刻事業が勸化僧の勸進活動に拠ること、しかし、その勸進活動と実際の刻工の手に係る「補刻」との関係は直線的に結ばれる緊密なものではないことが判明した。（『日本船載東禪寺版一切経の刊・印・修をめぐる一、二の問題』（『東アジア出版文化』にわたずみ）〈2004・3 二玄社〉）

「道永の勸進活動は、東禪寺版の墨丁・追雕の項で既述

したが、「甲辰」「乙巳」の干支の年にかかるものである。東禪寺版の事例から帰納された「甲辰」「乙巳」が、即ち淳祐四年・五年（日本寛元（一二四四・二四五）と比定される。巻四八④板「付詔」・巻二四七⑦板「詔」は、印面の現状から判断すると淳祐四年・五年の補刻葉の刻工名か、と考えられそうであるが、「付詔」の手に係る補刻葉は、道永の勸進による施財刊語の板の他、施財刊語「廣東運使寺正曾璽捨」の補刻葉も担当していることに注意しなくてはならない。金沢文庫蔵大藏経にも、

298 大般若波羅蜜多経卷三三三②付詔刊②廣東運使寺正曾璽捨」

とある。東寺藏一切経の内、東禪寺版『大般若波羅蜜多経』にも刻工名「付詔」は認められるが、すべて「廣東運使寺正曾璽捨」と結ばれている。巻三〇九⑨・巻三三三⑬・巻三四〇②・巻三六八⑧・巻四二二②は、道永勸化の施財刊語を有する補刻葉ではなく、すべて刻工名のない印面の磨滅甚だしいものばかりである。

即ち、東寺藏一切経の内、東禪寺版は、道永勸化の淳祐四年・五年頃以前の刷印に係るものであり、その点に関しては、既に指摘を了えている。

問題は、「付詔」という刻工の活躍時期である。（墨丁・追刻）のシステムを想定・導入する以前の旧来の判断――

施財刊語と刻工名とを直接に結ぶ——を以てすれば、「付詔」は一二二〇年頃の「廣東運使寺正曾噩捨」の時点より一二四四・一二四五年頃の道永勸化の時期まで二十年間以上、東禅寺・開元寺両版の補刻事業に係ったように想像されてきたのである。

しかし、東禅寺版の墨丁・追雕の項の事例から類推可能となったことは、付詔の補刻時期は一二二四年頃の「廣東運使寺正曾噩捨」捨財による補刻葉の時点に極めて近い時期（一二二〇年代初前期頃を想定）で、その補刻時の墨丁箇所、約二十年後の道永化縁による施財を追雕した。その痕跡が【一】で囲まれた施財刊語であった、という事実である。】（『開元寺版大藏経の〈修〉の世界』についての一、二の問題―墨丁追刻と題記入れ木―）〔『実践国文学』77号 2010・3〕

四、むすび

「王良」「江昌」の問題も、前節の引文に認められる「墨丁追刻」という技法を適用できるのではないか。刻工「付詔」などの担当した板木の「墨丁（或いは入れ木）」に加えられた「追雕」という工程を東アジア出版における〈刊・印・修〉の世界に頻繁に行われていた印刷技法として理解する

ならば、墨丁・入れ木による追雕と考えることもできる。東藏大藏経の如く、墨丁箇所を多く残したバージョンの例は、端的に以上のことを示している。即ち、福建の刻工「王良」「江昌」の活動期は、「丙午」や「安撫使賈侍郎捨」などの施財・干支に係るもので、「廣東運使寺正曾噩捨」には係らない、と考えることもできよう。「江茂」「王悦」の活動期にほぼ重なる。「王良」「江昌」における淳熙13年（1186）頃とその約四十年後の寶慶元・二年（1225）（6）という二期にわたる刻雕活動を想定するよりも、〈刊・印・修〉の世界に頻繁に行われていた印刷技法のひとつの施財刊語などの「墨丁（或いは入れ木）・追雕」の結果と考える方が、いまのところ考えやすいのである。あるいは、同一刻工が、40年後に別の依頼先からの需めに応じた、と考えることも不可能なことではない。しかし、中国宋代の〈刊・印・修〉の世界を重視するならば、「墨丁（或いは入れ木）・追雕」の可能性を抜きには考えられないのである。

日本に現存する南宋刊『大藏一覽集』は、東禅寺版大藏経の淳熙・慶元頃の補刻に従事した刻工「王悦」「王茂」などの手に係るもので、東禅寺版大藏経の「丙午（1186年）」「丙辰（1196年）」の頃の補刻・修補期に近い頃における刻雕（重刊とする証拠はいまのところ認められな

い)と考えてはば誤らないものと考ええる。榮西が、『興禪護国論』の撰述に『大蔵一覽集』を活用したとの説を継承するならば、榮西の渡宋滞在期が、刻工から推定される日本現存南宋刊『大蔵一覽集』の刷印期にほぼ重なってくることは、誠に興味深いものがある(『阿婆縛鈔』にも『大蔵一覽集』の活用が認められる点については、既に牧野「日宋の『版刻』を結ぶもの」(『日本文学』2002・7)で簡略にふれたので御参照戴きたい)。

* *

本稿をなすに当り、毎年の度々の閲覧・調査に御高配を賜り、今夏も引き続き熟覧書誌調査に格別な御配慮を頂きました本源寺・矢留文麿先生に厚く御礼申し上げます。

なお、本稿と緊密な関連を有する別稿「福洲版大蔵経の刻工「牛志・項思中・蔣成」など」(『実践女子大学文学部紀要』57集 2015・3刊行予定)も御参看頂ければ、幸である。

* * *

本調査・研究は、平成26年度科学研究費・基盤研究(B)(課題番号…222320052)の助成による成果である。